

ぎえもん ものがたり

「あらゆる機械の考案を引き受けます」という看板が東京銀座に掲げられたのは、1875年（明治8年）の7月11日。東芝の創業者、からくり儀右衛門と呼ばれる田中久重の店舗兼工場の看板である。この時から東芝は歴史を刻み始めた。報酬や損得よりも、考案することや挑戦することに興味の強かった久重は、どんなに小さな依頼でさえ、寝る間を惜しんで考案と発明にのめり込んだ。発明という夢を追いかけて続けた久重の82年の生涯は、まさしく新しい技術への挑戦の連続であった。



創業当時の店舗兼工場

からくり

久重は1799年9月18日、現在の福岡県久留米市にべっこう職人の長男として生まれる。わずか8歳で「開かずの硯箱」を考案。その後も日夜、からくりの考案と発明に没頭する日々を送り、家業を継ぐことを望んでいた父親の願いにも、久重の「発明工夫で天下に名を揚げたい」という強い意志は変わらず弟に家督を譲ることになる。

21歳の頃、地元の五穀神社でからくり興行に参加。久重の水仕掛け中心のからくりが評判を呼び、いつしか「からくり儀右衛門」と呼ばれて全国を興行するようになり、からくりも水仕掛けから水蒸気へ仕掛けと発展していく。



弓曳き童子



童子盃台

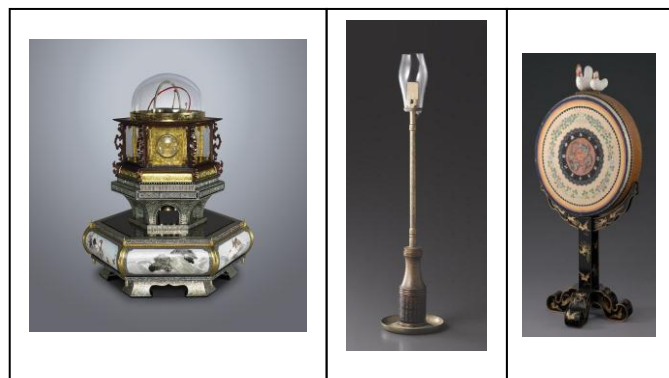
あかりと和時計

久重の才能はからくり人形だけに留まらず、持ち前の旺盛な探究心から、日常生活に使われる西洋の科学技術を応用した製品をも製造するようになる。1834年、久重（満35歳）は一家で大阪に移り住むが、大塩平八郎の乱で焼け出されて伏見に移り、1847年頃には機巧（からくり）堂を京都にかまえる。その頃から、人々の生活に役立つさまざまな和時計や灯具の発明工夫に尽力していく。大阪で焼け出された時の久重は、唯一残ったたくあん漬け二樽を貧民に施し、妻子を伴い飄然と伏見に赴いたと言われている。

当時としては画期的な明るさを持つ圧縮空気を利用した菜種油ランプ「無尽灯」や、「懐中蜀台」が人気を集めていた頃で、久重は時計の修理や工夫を凝らした珍しい時計などの製作も始めた。からくり人形の调速機構などに時計と同じ機構が使われていたことから、久重にとっては、報酬よりも当時のハイテク品に対する技術者としての興味が強かったに違いない。

さらに天文学や蘭学を学んだ久重は、「近江大掾」や「日本第一細工師」の称号を受け、生まれ故郷の久留米藩の士分にも取り立てられる。

1850年学んだ知識を活かして須弥山儀を、そして翌年最高傑作の万年自鳴鐘（重要文化財に指定）を完成。このころは収入が多かった時代だったにもかかわらず、入った金は右から左へ、発明工夫の資金として消えた。



万年時計

無尽灯

太鼓時計

近代化への貢献

久重はその才能を日本国の為に活かすようになる。ペリー艦隊が来航し幕末の動乱が始まった1853年、久重（満5歳）は技術力を見込まれ軍事力強化を望む佐賀鍋島藩に二人扶持で招聘される。京都は弟子の田中儀左衛門らに任せ、佐賀藩の精練方で汽車・蒸気船雛形、ボイラー、6ポンドアームストロング砲、凌風丸などの製作に携わり、西洋技術の導入に大きく貢献する。1864年、三人扶持で生地久留米藩にも招かれ、1866年80ポンド銅製アームストロング砲の試射に成功。同年、蒸気軍艦購入のため上海に同行する。廃藩置県前後の1871年頃には、久留米製鉄所や自宅で産業技術改良や生活改善の発明工夫を行っており当時の主な製品は以下の通りである。

煙草切り機、醤油搾取機、種油搾取機、蠶締機、改良竈、傘ろくろ製造機、自転車、人力車、精米機、水車、鍍金法、製菓機、写真機、浚渫機、久留米編織機、昇水機、無鍵の錠、ネジ切りゲージ、楕円削旋盤 ほか

田中久重 年表と東芝の創業

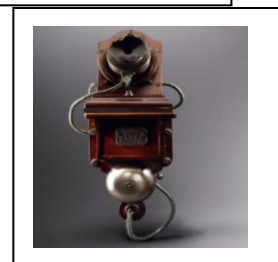
1799年（寛政11年）	9月18日、久留米に生まれる
1820年代	弓曳童子、童子盃台
1834年（天保5年）	大阪に移住、懐中蜀台製作
1837年（天保8年）	伏見に移住、無尽灯製作
1849年（嘉永2年）	近江大掾の称号を得る
1850年（嘉永3年）	須弥山儀製作
1851年（嘉永4年）	万年時計〔万年自鳴鐘〕
1852年（嘉永5年）	蒸気船〔スクリュース式〕の雛形
1853年（嘉永6年）	佐賀藩精練方に招かれる
1863年（文久3年）	佐賀藩6ポンド鉄製アームストロング砲
1873年（明治6年）	久留米より上京、翌年より通信器製造
1875年（明治8年）	銀座煉瓦街に工場兼店舗の創設（東芝の創業）
1881年（明治14年）	死去、青山墓地に葬られる



カノン砲模型



報時器



電話機

最後の旅立ち：通信技術へ



田中久重

東京・長崎間の電信線開通に伴い、通信の修理や製造を国内で行う動きがあった明治維新後の1873年（満74才）、三瀨県（現福岡県）の勧めもあって上京。久重は電信機や各種産業機械を製造し、日本の近代化に大きく貢献する。翌年、モールス電信機などの製作に成功。1875年完成したばかりの銀座煉瓦街に移り工部省指定工場となる。1878年には電話機・報時器を製作し、電信寮製造所が設けられると工場も買い上げられ弟子全員も工部省に採用された。弟子の多くは有為の技術者として、日本の近代化・産業振興の中で活躍し、会社を興していく。

新技術への挑戦を続け、「人々の生活を明るく、楽しく」と願い続けた久重も1881年には生涯を終えるが、「発明工夫をもって天下に名を挙げたい」という幼い頃からの志を果たした彼のDNAは、今も技術者に引き継がれている。

晩年浅草の興行師から金儲け目的で人形製作を依頼されたとき、久重は襟を正し、「国家に有用な機械を作る以外に利欲なく、からくり人形は少壮時代の児童の類」と断った、という久重らしいエピソードが残っている。